

名門譜代大名・ 酒井忠拳の奮闘

福留真紀

五代将軍綱吉の治世——



解説 「かけ走り」する名門の復活

山内昌之

「かけ走りの御奉公」という言葉があるらしい。著者の福留真紀氏によれば、身分・格式を重視する江戸幕府において、本来の高い家格にふさわしくない軽い職を、好き嫌いでなく勤めることだ。將軍への奉公、譜代の自覚をいわずに思い、何によらず進んで奉仕する気構えは、「懸け走り」「欠け走り」とも書かれた。たとえば、大老や老中という執政職を務める家柄の当主や惣領が江戸城の門番や火之番を務めるのは格落ちもいといところなのだ。しかし、「かけ走りの御奉公」でもいいから、まず上様の御為に仕えよと自分と息子を叱咤する人物がいた。どのような卑職であつても、徳川譜代名門の誇りを忘れずに勤め上げよと命じた人物こそ、本書の主人公・酒井河内守（雅楽頭）忠孝にほかならない。門閥譜代中の名門・雅楽頭流酒井家の出自であり、上州厩橋十五万石の領主である。

忠孝は、順調にいけば、曾祖父・忠世や父・忠清のように、苦勞なく老中や大老を勤められた政治家である。忠清は、四代將軍家綱の老中・大老を務め、本丸大手門前の下馬札前に上屋敷があつたことから、その権勢にちなんで下馬將軍と呼ばれた江戸初期屈指の実力者であつた。しかし、五代將軍・綱吉が忠清の権力と才能を嫌って斥けたために、忠清・忠孝父子は権力の栄華から失意の淵に沈むことになる。酒井家はもと徳川家の先祖松平親氏の次男広親に遡る家系を誇る。徳川家と遠祖が重なる門閥譜代であり、岡崎に由来する譜代よりも出自がはるかに古い。岡崎の前の山中譜代、安祥譜代でもなく、さらに前の岩津譜代でさえないのだ。徳川家の遠祖発祥地の松平郷に由来する一門といつてよい譜代筆頭なのである。酒井家は子孫が枝分かれして繁栄した名家であり、嫡流でいちはん家格の高い家が、雅楽助あるいは雅楽頭を代々名乗る家である。その当主が忠清であり、嫡男が忠孝だつたといえは、本書の主人公の自負心の輪郭がつかめようか。

福留真紀氏は、この親子の栄華の場が逆境に転落する人生の有為天変と人物情景を点綴した。得意の人が失意に沈む人間模様を描くとすれば、文体はともすれば暗くなりがちだ。しかし著者は、史料原文を優先しざやいたわりの念が出る現代語にわかりやすく置き換える技量で定評がある。『將軍側近 柳沢吉保』や『將軍と側近』などの新潮新書と同じく、本書でも独特なリズム感をもつ文体と史料の現代語訳は読みやすい。人事の動揺や苦痛を和らげようとする忠孝はじめ登場人物の努力は、確かに今の世に伝わってくる。本書では、家の格式だけでなく、人間力や人心掌握力も問われる徳川政治の厳し

さを通して、順風満帆だったかと思われた御曹司エリートが苦勞人として辛酸を嘗めるストーリーが語られる。それは現代人も共感できる歴史の教訓にもなっている。

忠孝は父・忠清と同じように、部屋住みでありながら十八歳で四品（従四位下）、二十三歳で侍従に進む。従五位下の浅野内匠頭が決してたどりつけない官位であり、吉良上野介が生涯をかけてたどりついた従四位上左近衛権少将に近い。しかも、城中で詰める部屋は徳川一門と門閥譜代の「黒書院溜」こと溜之間であった。同席は、会津松平（保科）、高松松平、彦根井伊などの名門ばかりである。しかも、「御能初」など重要行事を仕切り、老中に準じて働くために個室も与えられ、諸門の番人が下座して敬意を払うのが常であった。忠孝が寺社奉行や若年寄を経て直に老中に進むことを疑う者は誰もいなかったに違いない。ところが、五代將軍綱吉という傍系から出た専制君主は、「將軍御側」いわゆる側用人を重視し、岡崎どころか松平郷に遡及する門閥譜代の政治を否定する威厳を見せつけなければならなかった。越後騒動なる御家騒動の審理を担当した忠清の責任を追及し、彼がすでに死亡していたので息子の忠孝が逼塞処分を受けたのだ。「君臨すれども統治せず」の家綱を支えた酒井忠清・忠孝は、「君臨し統治す」の綱吉の代には不要となったのである。

しかし世に言われるほど綱吉は狭量でなかった。それは、忠孝を貞享四年（一六八七）に奏者番兼寺社奉行として最初の役職に登用したからだ。しかも綱吉は、下からの伺いを認めて町方の女房を死罪とした事件の再吟味を行った忠孝の判断を認める度量をもっていた。著者は、忠孝を「きまじめな人柄」とするが、この律義さがあとと万事に効いてくるのだ。『寛政重修諸家譜』は忠孝を「行跡篤実」と表現している（第二、巻五十九）。しかし忠孝には不運もつきまとう。頰の腫物がひどく飲食もままならぬほどの激痛が走る難病にかかったからだ。綱吉は箱根・塔ノ沢で療養しても体調が芳しくない忠孝の辞職を認め、領地の厩橋に近い伊香保で湯治をさせようとした。それでも天運はまだ忠孝についている。一つ目は忠孝の四女・槌姫と柳沢吉保の嫡子・吉里との間に縁談が持ち上がったことだ。綱吉の取り持ちであろう。二つ目は、忠孝が大留守居という「重職」に補せられたことだ。綱吉の寵臣・吉保と親戚になるのは、本来の家格からすればありえぬ縁談だったが、酒井家の復活にこれほど心強い援軍はない。福留氏は、忠孝にとってこの姻戚関係が「幕府対策への有効なルート」の確保を意味し、柳沢には「新興大名の身で名門譜代大名と姻戚関係」になる点で「双方メリットがあった」と説明するが、まことにその通りであろう。

他方、大留守居とは耳慣れぬ役職である。著者の研究では、忠孝の先祖・忠世を含めて史上六人しか就いていない。しかし、その役回りとなるとはつきりしない。とくに、老中支配の職でありながら、緊急事が出来しても老中不在時なら若年寄の指揮を受けるというのが忠孝には面白くない。大奥向きや江戸城玄閤前で変事が起これば臨機に措置

を取るべき役なのに、どうも外形ばかりでしらけることおびたらしい。

このあたりから福留氏の筆の運びは俄然精彩を放つようになる。結局、忠清失脚・死亡のあと老中ルートから外された忠拳を何らかの形で処遇せねば治まらず、むかしあつた重要な役職ながら実権をもたず、忠拳を封じ込めるにはもつてこいのポストだったというのだ。福留氏は明示的に触れていないが、この動機は綱吉と老中たちの利害が共通していたからではないだろうか。しかし、忠拳にも譲れない一線というものがある。

「御奉公に対する命がけの覚悟であり、この姿勢こそが名門譜代酒井家当主である、というプライド。これには、忠拳を自分たちとは一線を画す存在だと考えている老中への、複雑な心境も投影されていたことだろう」(本書八六頁)

門閥譜代たる自意識こそ「かけ走り」をしなくてはという使命感につながるのだ。俗にいう育ちの良さということにもつながる。封建制社会でこれ以上はない高い家格と石高に恵まれた酒井家は、一般に世間が考えるランクとは別の序列意識を持っていた。その根本は酒井家が「譜代大名」だという点にある。部屋住みながら忠拳の嫡子・忠相は、柳沢吉里のようにゆくゆくは国持大名になってしまふのではないか、そうなるべきではないというのだ。父の忠拳は、儀式の際、忠相が次のような序列で將軍の前に出たことを憂慮する。①国持大名四品、②酒井忠相、③国持大名無官の惣領、④譜代大名四品。この順でいけば、忠相はやがて外様の大大名たる国持大名のカテゴリーに組み込まれか

ねない。決して杞憂とはいえない。福留氏は、老中たちが強力なライヴァルの雅楽頭流酒井家を合理的に幕府政治の現場から遠ざけようとしたのではないかと疑っている。忠拳の不幸は、酒井家中興を期待した嫡子・忠相が老中・若年寄になる前に、四十二歳の若さで死んだことだ。嫡孫・親愛が病身で幼い頃から非常に「氣随」「短氣」で、不機嫌になると外で挨拶もろくにできないのも不幸であった。とても酒井家の嫡流を維持できないと見た忠拳は、傍系の遠縁から養子・親本を迎えるが、これも二十七歳で死んでしまふ。

その後に養子になるのは、親本の弟・忠恭である。この人物こそ、やがて大坂城代、延享元年(一七四四)に西丸老中、同年本丸老中兼任となり、忠清以来の幕閣中枢に雅楽頭流酒井家を復活させた器量人であった。ただし忠拳は、生憎なことに、この忠恭の慶賀すべき老中就任を見届けられなかった。享保五年(一七二〇)に死去していたからだ。しかし、忠拳の晩年は心安らかだったであろう。それは吉宗から「歴世の遺老」(代々の幕府の旧臣)として優遇されたことにある。福留氏は本書で、人あたりといい、生き方をゆるがせにしない所といい、不思議な魅力がある忠拳像を描き出した。政治的苛烈さでは人後に落ちない綱吉が珍しく敗者復活を許したほどの人物である。しかも、氣難しい綱吉の大名邸御成は「何の益も御座無く候」と平気で発言しても処罰されない得な人物なのだ。そして、人間観察力が歴代將軍でも秀逸だった吉宗は忠拳の美質を見抜い

ていたのだろう。

忠孝は酒井家一門の総帥として慶事はもとより、不祥事や厄介ごとを処理する使命も双肩に担ってきた。とくに苦勞したのは、中津藩八万石の小笠原胤胤の不始末処理である。蘭房治まらず、遊興三昧の殿様が家中に俸禄も払わず、出入り商人に賈掛金も払わないというのは破格というほかない。「長胤身の行ひあしく、家政も不良なりとて、封地八万石収公せられ」たのは当然であろう（『常憲院殿御実紀』巻八、元禄十一年七月二十九日条）。しかし、そのうち四万石が弟・長円に中津城ともども与えられたのは、忠孝の努力がなければありえないのではないか。また、本家相続を狙う野心家の親族を遠ざける画策など、忠孝はさすがと思わせる政治力にもたけている。

吉宗は幕府政治の故実に詳しい忠孝をたびたび招くなど厚遇した。その諮問は、政務・儀式・人事から旗本・御家人の在り方、さては風俗にまで及び、忠孝の答えには「足高の制」のヒントも含まれていたという。年を重ねて耳も不自由になった忠孝は、吉宗の召し出しにも遠慮するそぶりを見せた。すると吉宗は他者を介して、他の者とは違う存在である、もし若く健康ならば、毎日でも呼び出し、政事を論ずべき者と評価して、まだ尋ねたいことも沢山あるのだから、春には努めて出仕するようにとの沙汰をした。

「忠孝の不遇は、吉宗政権期において報われた」という福留氏の感想はまことに正しい。

戦陣でも上洛でも旗本の先頭を切って奉公することを本望本懐と信じてきた忠孝にとつて、家康の再来と目された吉宗の相談にあずかったことは、門閥譜代あるいは譜代筆頭の面目躍如というところだろう。吉宗の恩顧は、忠孝が思い描いてきた譜代の本領、「かけ走り」の本質を將軍がよく理解してくれたという感謝の念を強める一方だった。数年来の厚遇は、生涯を尽くしても感謝に足らないという忠孝の言葉は偽りではない。吉宗の言葉を「身にも命にも代え難く思います」と感謝する忠孝の心こそ、著者の共感と読者の感動にも通じる。七十三歳で世を去った忠孝の花道を飾ってくれたのは吉宗である。人間関係の洞察力は文学者だけでなく歴史学者にも不可欠のセンスであることを本書は教えてくれる。

（武蔵野大学国際総合研究所特任教授・歴史学者）